

太宰治の「お伽草紙」論

「お伽草紙」における〈桃太郎〉の不在

이 현 주*

(e-mail : hyunju88@hotmail.com)

目次

- 1.はじめに
 2. 戦時下における「お伽草紙」
 3. 太宰治における戦時下の桃太郎像
 4. 国語教科書からみる桃太郎像の変貌
 5. 太宰治が描きたかった〈桃太郎〉
 6. むすびに
-

1.はじめに

太宰治の『お伽草紙』は太平洋戦争末期の1945年3月から6月まで執筆され10月に刊行された作品である。太宰治の戦時下にかかれた作品を調べてみると、古典・史実・説話などを原典とした作品が数多く見られる。その中でも『お伽草紙』は日本人ならだれもが知っている昔話から素材を得て書き上げられている。「太宰の全作品の中の最高の作¹⁾」とも言われている『お伽草紙』には「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」などよく知られている昔話が太宰特有の筆致でパロディー化されている。しかし『お伽草紙』には昔話の中でももっとも知られている「桃太郎」は取り除かれていることがわかる。本論文では、『お伽草紙』における「桃太郎」の不在に対して、これまでいろいろな形態に変

* 인하대학교 강사 일본근현대문학

1) 奥野健男, 『太宰治』, 文芸春秋, 1973年, p.222

化してきた桃太郎像との相関関係を中心に論じてみたいと思う。その中でも明治期から敗戦まで使われていた小学校の国語教科書を中心にしたい。それはその時代による桃太郎像の変貌が明確にみられると思われるからである。

2. 戦時下における『お伽草紙』

太宰治の文学生涯は、一般的に前期、中期、後期に分けられている。その中でも中期は1938年から1945年といわれている。その時期は1938年7月の日中戦争から、1945年8月の太平洋戦争の敗戦までという日本の戦時期とほぼ一致している。太宰治の中期文学は戦争という時代背景と共に歩んできたとも言えよう。日本の文学界でも最も厳しかったこの時期に太宰は、私小説を中心とした前期の作品傾向とは全く異なって、明るくて、安定した力作を次々と発表している。その中でも太宰の特有の筆致で西洋古典、中国古典、史実、昔話など原典のパロディー化という新しい太宰文学を構築させている。

日本の戦時下の文学界と言えば、新体制の影響で出版業界を中心に軍・官による検閲が厳しくなりつつあった。太宰も余儀なくその影響を受けているが、「花火」²⁾の全文削除処分と「雲雀の声」³⁾の出版不許可などがそれである。その中でも「花火」は、1935年11月当時世間を騒がせた殺人事件を素材として書かれている。その事件の内容を簡略に紹介してみよう。

病院を経営した父親が経営不振に陥り、病院に保険をかけて放火詐欺を試みたが、失敗、そのかわりに当時放蕩息子（日大専門部歯科3年）に多額の生命保険をかけて謀殺を企画、妻の手も借りて東京の自宅で薬物注射や食べ物にまぜた毒薬を飲ませて殺害しようとしたが失敗、ついに長女の手も借りて包丁で長男を殺害し、強盗殺人を装ったものの、多額の保険金が疑われて親子三人が逮捕され、父親無期、母親が懲役15年、長女が懲役4年の処罰を受ける。

この衝撃的な殺人事件は倫理性が問われるなど、日本全国に衝撃を与えていた。しかし「花火」の内容はむしろ息子を殺した親子3人に憐憫を感じさせるように構成されている。次の引用は「花火」の最後の部分である。

2) 1946年11月に刊行された小説集『薄明』に「日の出の前」と改題して収録されている。

3) 「雲雀の声」は1943年に一時出版不許可になり、翌年刊行される予定であったが、印刷所が戦災で焼けてしまう。戦後になって、「パンドラの匣」と改題され発表することになる。

節子は、誰よりも先きに、まづ釈放せられた。検事は、おわかれに際して、しみりとした口調で言つた。

「それではお大事に。悪いお兄さんでも、あんな死にかたをしたとなると、やつぱり肉親の情けだ、君も悲しいだらうが、元気出して」

少女は眼を挙げて答えた。その言葉は、エホバをさえ沈思させたにちがいない。もちろん世界の文学にも、未だかつて出現したことがなかつた程の新しい言葉であつた。「いいえ」

少女は眼を挙げて答えた。「兄が死んだので、私たちは幸福になりました」

この「花火」の最後の部分は、当時新聞に載せられた記事を脚色したものである。特に節子の最後のせりふである「お兄さんが死んだので、私たちは幸福になりました」は新聞に載っていたものをそのまま文章にしたとされている。「花火」の中では、放浪息子がいかに家族を苦しめていたかを強調して描いていることから、息子を殺さなければならなかった家族に憐憫の情が感じさせられている。しかしいくら放浪息子であったにせよ、家族3人が話し合つて息子を殺したという事実は道徳的に許しがたいことであつただろう。「花火」が全文削除という処分をうけていたのは、当時の〈風俗壊乱出版物の検閲標準〉から調べてみると、6番目の‘その他善良なる風俗を害する事項’にあつたことと考えられる。その後、1943年に発表した「雲雀の声」も一時出版不許可となるが、2つの作品とも太平洋戦争が勃発した後であることを考えると、戦争中の検閲がいかに厳しく行われていたかを物語ってくれる。

この2つの処分に対して、太宰は「十五年間」⁴⁾の中でその当時の心境を述べている。

私のある四十枚の小説は発表直後、はじめから終りまで全文削除を命じられた。また或る二百枚以上の新作の小説は出版不許可になつた事もあつた。しかし、私は小説を書く事は、やめなかつた。もうこうなつたら、最後までねばつて小説を書いて行かなければ、ウソだと思つた。(『太宰治全集』1998年、筑摩書房、210頁)

この2つの処分は太宰の創作活動に大きな転機をもたらしたことは間違いない。その前は「駆け込み訴へ」(『中央公論』1940年2月)、「走れメロス」(『新潮』1940年5月)、「新ハムレット」(文芸春秋社刊行、1941年7月)など主に西洋古典をパロディー化した作品を発表しつづけてきたが、文学作品に対する検閲が厳しくなるにつれて、西洋古典の代わりに日本の史実や説話を原典とした作品が目立つようになる⁵⁾。1941年12月太平

4) 『文化展望』1946年4月、太宰治が東京に上京してから15年間を回想している。

5) 「右大臣実朝」(1942年9月)、「新釈諸国噺」(1944年1月)、「お伽草紙」(1945年10月)などを発表している。

洋戦争がはじまると同時に「米英鬼畜」というスローガンが日本全国に広まるなどアメリカやイギリスに対する敵愾心を扇動するためのさまざまな政策が施されていたのである。このような状況の中で、西洋古典を取り扱うには限界があったのではなかろうか。ともかくもこの時期からの太宰文学は日本の史実や説話などに注目するようになる。

その中でも『お伽草紙』は日本国内が空襲に覆われ、文学界の機能が完全に停止した時期に書かれている。ほとんどの作家たちが国策主義的な作品を書いたり、あるいは創作活動を一時中断していたのに対して、太宰は「太宰の全作品の中の最高の作」とも言われる『お伽草紙』を書き上げるのである。その頃、『お伽草紙』の執筆を手伝っていた、小山清は『「お伽草紙」の執筆頃』の中でその当時のことを次のように回想している。

「舌切雀」を書き終へられたのは、七月上旬、日をおかず甲府が爆撃をうけて、水門町のお宅は焼かれて、私が駆けつけたときは、柳町の太内さんのお宅に避難されておられました。（中略）私は完成した「お伽草紙」の原稿を託されて、帰りの汽車の中でおそらく最初の読者たる喜びを味ひました。原稿は帰った翌日すぐ筑摩書房へ届けました。（31頁）

太宰が「十五年間」の中で述べた「最後までねばつて小説を書いて行かなければ、ウソだと思つた」のように敗戦の色が濃くなり、疎開先の甲府で転々としながら『お伽草紙』を完成させるのである。

3. 太宰治における戦時下の桃太郎像

『お伽草紙』は「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」など4つの昔話で構成されている。しかし日本人にもっとも知られている「桃太郎」が除かれているが、『お伽草紙』の前書きを読んでも、昔話の中でも一番最初に「桃太郎」について言及されていることがわかる。

母の苦情が一段落すると、こんどは、五歳の女の子が、もう塚からでませう、と主張しはじめる。これをなだめる唯一の手段は絵本だ。桃太郎、カチカチ山、舌切雀、瘤取り、浦島さんなど、父は子供に読んで聞かせる。（『太宰治全集』1998年、筑摩書房、296頁）

しかし、本文ではこの五つの話の中で桃太郎だけが取り除かれている。その理由について太宰自ら「舌切雀」の中でかなりの分量で述べている。

私は、カチカチ山の次に、いよいよこの「私の桃太郎」に取りかからうとして、突然、ひどく物憂い気持ちに襲はれたのである。せめて、桃太郎の物語一つだけは、このままの単純な形で残して置きたい。(中略) いやしくも桃太郎は、日本一といふ旗を持つてゐる男である。日本一はおろか日本二も三も経験せぬ作者が、そんな日本一の快男子を描写できる筈が無い。私は桃太郎のあの「日本一」の旗を思い浮かべるに及んで、潔く「私の桃太郎物語」の計画を放棄したのである。(383~384頁)

太宰は桃太郎を書かない理由として、「桃太郎の物語一つだけは、このままの単純な形で残して置きたい」と言いながら、桃太郎が〈日本一〉という旗を持っている日本一の男子であるがあげられている。そして結局〈日本一〉という言葉が気掛かりになって桃太郎物語は諦めたことを明らかにしている。桃太郎の不在の理由に対して、いままでの先行論を調べてみると、大きく二つに分けられている。その一つは、その当時、戦時下の国策に対する太宰の批判や反感の意識が反映されたという見方である。

(前略) 太宰が「お伽草紙」において意識的に〈日本一〉的なるものに自己の〈凡庸〉を対置しようとしていることは明らかである。当時、桃太郎が戦意高揚の具に利用されていたことを思えば、ここに太宰の時勢に対するひそやかな抵抗を読みとることも不可能ではない。少なくとも時代の悪気流との緊張関係なしにはこの作品は成立しなかったであろう。6)

東郷克美氏は桃太郎が戦時下の軍国主義の象徴として利用されていたことを指摘しながら、太宰が桃太郎を書かなかったのは「ひそやかな抵抗」とであると述べている。

(前略) 昭和十年代というのは、戦争とファシズムの国家体制が、その軍国化と侵略(海外征伐)のイデオロギーを、桃太郎の鬼退治物語に託してみずから語っていた時期にほかならない、とすれば太宰の桃太郎物語を書かないという決断は、桃太郎物語に託されていたその国家体制のイデオロギーを婉曲に否定していたことになりはしないか。7)

また松本建一氏も昭和10年代の日本の国家体制が軍国化と侵略のイデオロギーであったことをあげながら、太宰が桃太郎を書かなかったのは、このような国家体制に対する硬い決断であることを主張している。以上2つの先行論では桃太郎の不在について、戦時下という時勢との関連性に注目しながら、太宰の軍国主義に対する抵抗として解釈している。

太宰が桃太郎を書かなかったもう一つの理由を国家体制からの逃避として捉える見方である。すなわち軍国主義の象徴として〈日本一〉の旗を掲げた桃太郎をパロディー化させる

6) 東郷克美『日本近代文学 - 「お伽草紙」の桃源郷』1974年 p.61

7) 松本建一『太宰治とその時代』第三文明社 1982年

というのは、国家体制を批判することになる。従って太宰はそれを書けなかったという批判である。

（前述）「桃太郎」を書かなかったことに太宰の軍国主義批判、時勢への抵抗を読み取るなど言語道断だ。（中略）端的にいえば、太宰の小説が弱者の口説の文学だから、「桃太郎」をかけなかったのだ。8)

いままでの引用からわかるように太宰が「桃太郎」を書かなかった理由について、無理に思想性を持たせようとする傾向が強すぎてむしろ不自然に思わせる部分もあると思われるが、桃太郎像が時勢によって多様な形で変貌し続けられてきたのは事実である。特に戦時下という状況の中ではその変貌は著しくみられる。

ここで太宰が『お伽草紙』を書いた時期に持っていた桃太郎のイメージを考えると、<日本一の旗を持っている快男子>や<完璧な絶対の強者>という桃太郎像がうかがえる。前の引用でもわかるように、太宰が<日本一の旗を持っている>桃太郎に拘っていたのが確認できる。

しかし桃太郎像が最初から<日本一の旗を持っている>男であったのではない。桃太郎物語はたいてい室町時代から江戸時代の初期にかけて発生されたと伝えられているが、発生当時の桃太郎像は素朴な子供として描かれている。それが時勢によって様々な姿に変貌しつつつけてきたのである。太宰が持っていた桃太郎像は最初の桃太郎ではなく、すでに時代の要求に変貌された桃太郎だったのである。太宰が自ら「舌切雀」の冒頭の中で、<このままの単純な形で残して置きたい>と語ったのは、桃太郎を昔話のように素朴な子供のままだに残して置きたいという願望を表わしていたとも言える。東郷氏も指摘したように、太宰自身も桃太郎が<戦意高揚の具>に利用されていたことを念頭に置いていたのであろう。ここで太宰が桃太郎を書かなかった理由は、桃太郎像の変貌と深く関わりがあると思われる。

それでは太宰が『お伽草紙』を書いたころに持っていた桃太郎像に至るまで、どういうふうに変貌されてきたのか、桃太郎の一連の変貌を辿ってみることにしたい。その中でも日本の小学校の国語教科書を通して調べてみることにしたい。それは日本の小学校の国語教科書では時代に応じて変貌されていく桃太郎像が著しく見られるからである

4. 国語教科書からみる桃太郎像の変貌

桃太郎像は1887年の小学校の国語教科書『尋常小学読本』に載せ初めてから第2次世界大戦後その姿を消すまで、様々な変貌を成し遂げてきた。まず明治20年の『尋常

8) 大久保典夫『太宰治「お伽草紙」論覚え書き』第三文明社 1982年 p24

『尋常小学校読本』の教材化に採択された理由として、昔話は「意義の理解し易い」ところがあげられる。「祖父母の物語として家庭生活にあって伝承されていたのでなじみやすい」という背景があったとされる。

桃太郎話ははじめは大人向けのもが多かった。桃太郎の誕生によって二つに分けられている。川から流れてきた桃の実から生まれたという果生型と、お爺さんとお婆さんが桃を食べて若返りして桃太郎を産んだという回春型などがそれである。江戸時代の文献では回春型の方が多く見られるが、明治時代に近づくに従って果生型に変化していく。この傾向は明治期に入ってから始まる、日本民話を体系化していく過程で生じたと思われる。それは日本民話の体系化は子供を対象にしていたため、大人向けの回春型よりは果生型の方が優先されたと思われる。果生型の中には犬、猿、雉などの動物の登場と共に、鬼退治という子供の興味を引き起こす内容が含まれていたからであろう。

桃太郎がはじめて教材化されるのは国策やイデオロギーなどの目的ではなく純粋な目的であったことがわかる。内容にも昔話的な面影と純粋な桃太郎がそのまま描かれている。

桃太郎は、犬猿雉を供につれ、鬼が島へわたりて見ると鬼は、門を閉ちて入れませぬ。それ故、雉は、一ばんさきに、門のやねをとびこえ、次に猿はへいをのりこえて、内から門を開きました。そこで桃太郎は、犬と一しよに、門の内におしり、多くの鬼とたゝかひ、つひにおくまでせめこみした。



(「尋常小学校読本」1887年)



(尋常小学校読書教本 今泉本) 1894年)

鬼が島へつきたるに、門固くして、入ることかなはず、桃太郎、力をこめて、之をおしやぶり、内にかけ入れば、鬼ども、あまた出てきたりて、桃太郎にうちかゝれり。

1897年にはいと、国語教科書の桃太郎像は定着化していく。日清戦争後、日本の躍進の状況に適應させるため教育改定が行われ、それに従って教科書の内容にも軍国主義を強調したものが目立つようになる。1900年「国語読本尋常小学校用」(坪内本)の桃太郎を調べてみると、軍国主義化された桃太郎像がうかがえる。

わたくしは、おにがしまへ、おにたいぢにゆきますから、ひょーろーを、こしらへてください。

この文章には戦争や軍隊を想起させる「ひょーろー」（兵糧）という言葉に注目しなければなら

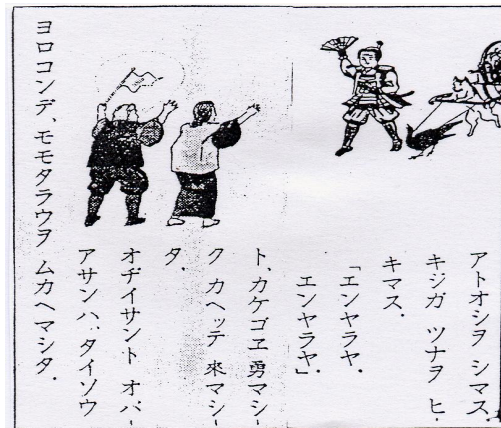


(明治33年 国語読本尋常小学校用 (坪内本))

ない。そして太宰の〈日本一の旗〉をもっている桃太郎像が登場していることにも注目しなければならない。すなわち〈日本一の旗〉をもっている桃太郎像は日本の軍国主義を象徴する人物にイメージ化されていたことがわかる。

大正時代にはデモクラシーの影響を受ける時期であったので、教育思潮にも大きな変化がみられる。児童中心の教育の主張がそれであるが、小学校の教科書でもその変化がみられる。1918年には一種の国定教科書に統一され「白読本」になって、1927年まで15年間使用されることになる。桃太郎は11ページの長い文章と供に、各ページに挿絵があって絵本のように感じられる。内容にも明治期の桃太郎と異って、元来の桃太郎を感じさせる。鬼ヶ島征伐の理由も書かれていないし、〈日本一という旗〉を持った桃太郎の代わりにかわい少年として子供たちに親しまれるように描かれている。太宰もおそらく小学生のころこの教科書で桃太郎を接したと思われる。

1941年3月1日には小学校令を改正し、国民学校になって戦時体制が強化されるようになる。教科書も全面的に改定され、この時期の教科書に登場した桃太郎にも変化をもたらす。最後のところの挿絵には、桃太郎の凱旋を迎えるお爺さんとお婆さんの姿が描かれている。おじいさんは日の丸が描いてある旗を振りながら桃太郎を歓迎している。これは〈帰還兵士歓迎〉という時代背景の影響を考えなければならない。まさに国民的感動を強調し、皇国主義を強調したいという戦

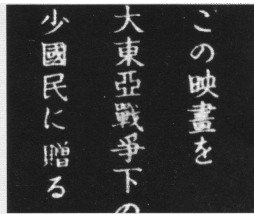


(昭和16年 国定国語教科書)

時下の時代性が色濃く感じられる。

いままで1887年から昭和の戦時下に発行された小学校の国語教科書を中心に桃太郎像の変貌を探ってみた。太宰が「お伽草紙」を書いた当時に持っていたく日本一の旗を持っている桃太郎像は時勢の影響によって軍国主義化された桃太郎だということがわかった。推測してみると、太宰が持っていた桃太郎像は明治33年の「国語読本尋常小学用」の桃太郎にもっとも接近していると思う。1897年代は日清戦争後、国家主義がもっとも強調される時代でもあって、日本国民に親しみのある桃太郎をく日本一の戦士として強烈なイメージに単純化された桃太郎像がつくられていたのである。

また日本の太平洋戦争ではく鬼畜米英打倒というスローガンと相俟って、1897年代につくりあげられた鬼ヶ島の鬼たちを退治する桃太郎像が軍国主義の象徴としてふたたび登場されるようになっていたと思われる。また1929年7月号の『少年戦旗』には桃太郎が犬、猿、雉と一緒に鬼ヶ島を征服した後得た宝物を一人占めしたため、犬、猿、雉は力合わせて桃太郎を村から追い出すという話展開になっている。これはその当時日本中に広まっていたプロレタリア思想の影響で、桃太郎を資本主義の象徴として描いていることがわかる。このように桃太郎像の変貌は教科書だけではなく新聞、雑誌、漫画、映画などすべてのジャンルで見られる。特に1943年3月に上映されたアニメーション〈桃太郎海の鷲〉は日本軍の戦意を高揚させる目的で製作されたことがわかる。桃太郎像は当時アニメーションという新しいジャンルを通して小学校の国語教科書とともに世界一たくましいキャラクターとして位置づけられるのである。



(일본애니메이션 50년사)

5. 太宰治が描きたかった〈桃太郎〉

いままで国語教科書を中心に桃太郎像の変貌を探ってみたが、1924年6月に執筆された芥川竜之介の「桃太郎」にも、また新しい桃太郎像が作りあげられている。この作品の中には、単純で善良な鬼たちを征伐する恐ろしい悪人の桃太郎が描かれている。芥川によって桃太郎の物語は見事にパロディー化され、新しい桃太郎像が生まれたのである。

鬼は熱帯的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊ったり、古代の詩人の詩を歌ったり、頗る安穩に暮してゐた。(中略) お前たちも悪戯をすると、人間の島へやつてしまふよ。人間の島へやられた鬼はあの昔の酒顛童子のやうに、きつと殺されてしまふのだからね。え、人間といふものかい？、人間といふものは角の生えない、生白い顔や手足をした、何ともいはず気味の悪いものだよ。おまけに又人間の女ときた日には、その生白い顔や手足へ一面に鉛の粉をなすつてゐるのだよ。(中略) 男でも女でも同じやうに、嘘はいふし、欲は深いし、焼餅は焼くし、己惚は強いし、仲間同志殺し合ふし、火はつけるし、泥棒はするし、手のつけやうのない毛だものなのだよ。9)

芥川の「桃太郎」には人間の世界を風刺しながら、桃太郎と鬼のイメージを逆転させている。このような芥川の昔話のパロディー化は「猿蟹合戦」でもみられる。太宰が芥川を尊敬し、影響されたと言われていることから芥川の「桃太郎」を知らなかったはずがない。「お伽草紙」の4つの物語が原典をパロディー化させるという方法論と類似していると思われるが、「お伽草紙」のもう一つの特徴は昔話では必ず登場する〈悪人〉が存在しない

9) 芥川龍之介「桃太郎」『大阪毎日新聞社』1924年

物語となっているところである。

オニハ コナヒダ アヅカツタ コブヲ ツケマス ミギノ ホホ オヤオヤ トウトウ コ
ブ フタツ ブランブラント オヂイサン ムラヘ カヘツテ ユキマシタ

実に、気の毒な結末になつたものだ。お伽噺に於いては、たいてい、悪い事をした人が悪い報いを受けるといふ結末になるもののだが、しかし、このお爺さんは別に悪事を働いたといふわけではない。緊張のあまり、踊りがへんてこな形になつたといふだけの事ではないか。それかと言つて、このお爺さんの家庭にも、これといふ悪人はあつた。また、あのお酒飲みのお爺さんも、また、その家族も、または、剣山に住む鬼どもだつて、少しも悪い事はしてゐない。つまり、この物語には所謂「不正」の事件は、一つも無かつたのに、それでも不幸な人が出てしまつたのである。(314頁)

このように『お伽草紙』には昔話の構成要素である〈勧善懲悪〉という形式が完全に否定されている。すなわち『お伽草紙』は昔話から素材を得ているが、すでに昔話ではなくなるのである。しかし〈悪人〉がいなくても不幸な人は出るという皮肉的な結末になっている。

太宰は〈舌切雀〉の冒頭で自分が描こうとした桃太郎像について次のように語っている。

私は多少でも自分で実際に経験した事で無ければ、一行も一字も書けない甚だ空想が貧弱の物語作家である。それで、この桃太郎物語を書くに当つても、そんな見た事も無い絶対不敗の豪傑を登場させるのは何としても不可能なのである。やはり、私の桃太郎は、小さい時から泣虫で、からだが弱くて、はにかみ屋で、さつぱり駄目な男だつたが、人の心情を破壊し、永遠の絶望と戦慄と怨嗟の地獄にたたき込む悪辣無頼にして醜怪の妖鬼たちに接して、われ非力なりと雖もいまは黙視し得ずと厳然立つて、黍団子を腰に、かの妖鬼たちの巢窟に向つて発足する、とでもいふやうな事になりさうである。(383頁)

太宰が構想していた桃太郎は、〈日本一〉強い男でもなければ、鬼ヶ島の鬼たちを叩きつぶす勇敢な男でもない。他の4つの作品と同じく、元来の桃太郎像とは完全に異なる貧弱でまったく駄目な男として描こうとしていたことがわかる。『お伽草紙』には「桃太郎」が除かれていると雖も太宰は所々に自分が描きたかった桃太郎像について具体的に言及している。

6. むすびに

このように桃太郎像は時勢によって、様々な姿として描かれてきたことが確認できた。太宰治が持っていた桃太郎像は小学校のころ接した子供らしいかわいい桃太郎ではなく、戦

時体制が強調された時代に生まれたく日本一の旗を持っている快男>であったのである。太宰はこれまで時代の要求で変貌しつづけてきた桃太郎にこれ以上手を加えることは意味のない作業だとおもわれたのではなかろうか。そして芥川竜之介によってパロディー化された新しい桃太郎像が存在していたことも念頭に置かなければならない。また「お伽草紙」の桃太郎の不在に思想性を持たせようとするならば、太宰は意図的に「桃太郎」や「猿蟹合戦」のようなく戦>を素材にしている物語を扱っていなかったという解釈もできるだろう。

【参考文献】

- ・赤木孝之 1994年『戦時下の太宰治』武蔵野書房
- ・芥川龍之介 1924年「桃太郎」『大阪毎日新聞社』
- ・大久保典夫 1982年『太宰治「お伽草紙」論覚え書き』第三文明社
- ・奥野健男 1973年『太宰治』文芸春秋
- ・高崎高治 1980年『戦時下の文学周辺』
- ・都築久美 1985年『戦時下の文学』和泉選書
- ・東郷克美 1974年『日本近代文学 - 「お伽草紙」の桃源郷』
- ・松本建一 1982年『太宰治とその時代』第三文明社

要 旨

太宰治は戦時期に『お伽草紙』を執筆しているが、その中には日本人ならばだれもが知っている「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」など4つの昔話で構成されている。内容は太宰特有の筆致で原典をみごとにパロディー化し、結論を逆転させるなど新しい太宰文学を構築させている。しかし「お伽草紙」に日本人にもっとも知られている「桃太郎」が不在していることに注目してみた。太宰自らも述べているように当時桃太郎像は〈日本一の旗を持っている〉男として描かれ、軍国主義を象徴する人物として知られていた。このように桃太郎像は時代の流れによって、様々な姿で変貌してきたのである。特に小学校の国語教科書の中には素直な桃太郎から太平洋戦争後には英米と戦う強い戦士まで桃太郎像の変貌が著しく現れている。太宰が持っている〈日本一の旗を持っている〉桃太郎像は明治30年ごろから登場しはじめて、太平洋戦争とともにふたたび軍国主義の象徴として描かれていることがわかる。太宰はいままで様々な姿で変貌しつづけてきた桃太郎像を批判しながら、これ以上桃太郎について言及することを拒んだのである。また芥川龍之介の「桃太郎」を意識した可能性も否定できない。

キーワード：戦時期、昔話、桃太郎、パロディー化、国語教科書

투 고 : 2010. 5. 31
1차 심사 : 2010. 6. 12
2차 심사 : 2010. 6. 26